

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026 年(令和8年)
3月5日 第754号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2025年12月7日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉



「ここにいるよ！」

一人の若者 (30)



※この投稿は国立に住む一人の出産適齢期女性が、講演会に勇気をもたらして誰にも言えなかった心の内をひっそり呟いているものです。母になった方をはじめとした様々な方々を責める意図は一切ございません。

「人生は選択の連続である」。シェイクスピアのその言葉は、30歳を迎えた自分に重くのしかかる。同じ言葉であるはずなのに、制服を着ていたあの頃の私と今の私とはなんだか受け取り方がずいぶん違うのだ。それは最近自分のまわりに次々と現れる選択が今までとは比べものにならないくらい大きく、重たいものになってきたからかもしれない。最近の一番の悩みは子どもを産むかどうか。私にとっては子どもが好きかどうか、そんなシンプルなことではない。現実問題、子どもが大好きで教育の仕事を生き甲斐にしている私がここまで悩んでいる。

産むのを悩む理由はたくさんある。自分自身の問題だけでなく、生まれてからずっと不景気と言われる経済状況、福祉の制度に頼れず起きた数々の悲しいニュース、「じゃあなんで産んだんだよ」と言われる自己責任論、他国では戦争が始まり、我が国の周りもなんだか物騒。社会への不安も大きい。

どんなことを考えても、最後に辿り着くのはいつも「この世界に生まれて、本当に子どもは幸せになれるか?」「子どもを産む理由は?」とSNSで調べたことがある。すると「人生の迫体験」「親に子を見せるため」「老後助けてもらおう」というコメントで溢れていた。どこをみても自分たちのためののだ。産むということは子に明るい未来を与えるようで、同時に生きる義務を課すものでもある。その子が望んでやって来るわけではないのに、始まったらもう戻れない不可逆なもの。ツキさんが本書で述べている「私

の子供は、私の物語を盛り上げるために存在するピースではない」という言葉、私の心の迷いの根本はここなのだ。これまでも先祖様たちが命を繋いでくれたからこの世界が成り立っていることへの理解と感謝はあるけれど、自分のためという理由しか見つからない今、産もうと決断ができないのである。

そしてこんな風に悩んでいる最中、頭の中で「こっちは見て!」と主張してくるのが年齢だ。身体づくりの問題として、子どもを産むにはどうしたってリミットがある。誕生日ケーキのロウソクが増えるたび、この問題について悠長に考えている時間はないのだと実感して焦っている。

こんな悩み、話したいけど話せない。自分がこう話すことで誰かを責めることには絶対になりたくない。孤独を感じていた私に、この本は雑踏の中で「おい、仲間がここにいるよ!」と手を振ってくれたような気がする。

この本には答えが書いてあるわけではない。ただ月岡ツキという女性が、人生の中の一つの選択について丁寧に考察をしたエッセイだ。

実際この本を読んで、自分自身の道が決まったわけではない。ツキさんも自身の立場を「DINKS(仮)」としているように、自分もやっぱり(仮)なのだ。

だけど、「同じように悩んでいる人がいる」と知れただけで、今はいい。きっと子どもの問題だけに限らず、どの問題にも人の数だけ考えや葛藤があり、全員が全員それぞれのステージで悩みながら生きている。この本を読んでそのことを感じられてよかった。

私と夫はどう生きていくのか。きつとまだまだ悩むけど、たぶんそれでいい。

・月岡ツキ著『産む気もないのに生理かよ!』(飛鳥新社)

ブッククラブから

ブッククラブ今年度テーマ 自分と「似ているもの」／「似ていないもの」――

三島由紀夫著『金閣寺』の感想 ― 行動か認識か ―

伊藤 豊



昭和40年代半ば、初めて金閣を見た。想像していたよりも小さく、金箔は剥がれ、美しくもなかった。ただ創建時のオリジナルは放火によって失われ、しかもそれがこの寺の学僧によるものであったという不可解さが強く印象に残った。

その後、高校生になって『金閣寺』を読んだが、学僧がなぜ犯行に及んだのかは判然としなかった。しかし、彼が自らを振り返り、体が弱く運動も苦手で容姿に自信がない上、吃音であることから、世間を一步離れたところから見つめ、自己世界を肥大させざるを得なかったことに共感を覚えた。

今回読み直してみても、そもそも本作は実際の犯人、林養賢に寄り添い、犯行の理由を追究したものではないことがよくわかった。むしろ作者は、敗戦によって突然訪れた価値観の転換の中で新たな生き方を模索せざるを得なくなった若者の心情を、放火犯の行動を借りて描いたのだ。それが同時代の多くの読者の心を捉えたのだろう。それは1956年10月『新潮』での連載終了後直ちに単行本として刊行され、年内に15万部を売り上げたことが

物語っている。

新たな生き方を求められたのは、作者も同様であつたろう。幼少時から病弱で、徴兵検査にはなんとか合格したものの、入隊検査で肺浸潤と誤診され、入営できないまま敗戦を迎えた。16歳で既に小説を発表し高い評価を得ていたが、彼を評価した先輩作家たちは戦後文壇では後方に退いてしまっていた。彼は人としても、作家としても再出発を図らなければならなかった。

本作の主人公溝口は寺に生まれ、父から「金閣ほど美しいものは地上にない」と教えられる。が、その後父に連れられて実際に見た印象は、「美というものは、こんなにも美しくないものだろうか」という落胆だった。にもかかわらず、彼は誰にとつても目に見えて自分の誇りになるものを求め、心の中でその美を蘇らせていった。

その後彼は父の遺言に従って金閣寺（鹿苑寺）の徒弟になった。そして昭和19年、彼は京都を襲う空襲によって金閣と自分がともに焼き滅ぼされるだろうという想像に励まされる。美と自分を結ぶものが見つかったからだった。しかし、京都の街は焼かれず、その生き甲斐も

失われてしまった。やがて、金閣の存在は彼の行動を阻害するものと化し、焼き滅ぼすことを決意する。そのことで自分と金閣、そして世界との関係を逆転できると考えたのだ。

この溝口の考えに対立する存在が登場する。友人の柏木である。彼もまた不自由な足を持つことから世から疎外されているが、行動によって社会を変えるのではなく、自分の認識を変えることで社会との関係を変え、その中で生きていくことができると主張し、したたかに実践して見せる。しかし、溝口は悪を犯すことを決めたことで自尊心を高め、実行に至る。

現実変革のための実行動か、それとも認識の変更かは、作者にとつて生涯を貫く問いとなったのではないだろうか。数年前、私は彼が亡くなる1年前に東大全共闘と対峙した様子を記録した映画を見た。意外なことに彼は終始笑顔で、その場にいることを楽しんでいるようにさえ見えた。それは、変革の方向が正反対であるにも拘わらず、実行動を選んだ彼らに、自分と「似ているもの」を感じたからではなかったかと、今は思える。

(新潮文庫)

新着図書から

〈総記〉 戦争と報道 栗原俊雄 (岩波書店) 070		だまされない力 教育とは何か タイム・インゴルド (亜紀書房) 371 370	
〈哲学 心理学 宗教〉 哲学史にしろりをはさむ おやつのおぼうさん 熊野純彦 (青土社) 井出留美 (くもん出版) 188 104		〈自然科学〉 南緯 69 度のチーム南極地域観測隊 原田尚美 (WAVE 出版) 対馬ルリ子 (青月社) 奥真也 (朝日新聞出版) 佐藤真澄 (汐文社) 498 498 495 402	
〈歴史〉 ホロコーストを知るための 101 の質問 マルクス・ロート (白水社) 被爆者・切明千枝子さんとの対話 桐谷多恵子 (彩流社) ナチス党員とはだれだったのか ウルリヒ・ヘルベルト (現代書館) 不法に仕えた法律家 ミヒヤエル・フェルスター (アルファベータブックス) シオニズム 武器としての非暴力 パレスチナ占領 スガモブリズン リミタリアニズム イングリッド・ロベインス (草思社) 女たちよ、大志を抱け 飯田未希 (中央公論新社) 文化が違えば、心も違う? コミュニティを実践すること その〈男らしさ〉はどこからきたの? 小林美香 (朝日新聞出版) 子どもでいらなかったわたしたちへ 高岡里衣 (子どもの未来社) 私のからだは私のもの 日本被団協と出会う 老いと介護の日本史 217 209 289 234 316 316 319 319 329 329 331 331 336 336 361 361 367 367 367 367 369 369 368 368 369 369		〈工業〉 優しくない地球でひとが生きのびるための 80 の処方箋 品田知美 (亜紀書房) 永山祐子 (集英社) 520 519	
〈社会科学〉 鶴見太郎 (岩波書店) 中見真理 (NHK 出版新書) 平野雄吾 (筑摩書房) 内海愛子 (岩波書店) ロベインス (草思社) 飯田未希 (中央公論新社) 北山忍 (岩波書店) 宮内泰介 (新泉社) 小林美香 (朝日新聞出版) 子どもでいらなかったわたしたちへ 高岡里衣 (子どもの未来社) 平井美津子 (高文研) 大塚茂樹 (旬報社) 新村拓 (吉川弘文館)		〈芸術〉 イラストで出会う女性たちのいる美術史 李君棠 (フィルムアート社) 団地団 (集英社) 男が「よよよよよ」と泣いていた 山口仲美 (光文社新書) 〈文学〉 松本清張の深層心理 キリンが文学を聞いたら 読売新聞文化部「本よみうり堂」編 (書肆侃侃房) 老いのレッスン 女王さまの休日 たとえば孤独という名の嘘 彼女たちは楽園で遊ぶ 価値あるもの 松浦弥太郎 (日経 B P 日本経済新聞出版) 刻印 老後ひとり、暮らしています。 松原文枝 (KADOKAWA) イオクソン (CE メディアハウス)	

〈公民館 70 周年事業〉

3 月 10 日 (火) より、
 公民館正面をリニューアルして、
 70 周年記念メッセージを掲示します！

＼ 詳細は公民館だより 3 月号をご覧ください。／



昨年より「公民館 70 周年事業をともに考える会」を立ち上げ、市民のみなさんと様々な記念事業に取り組んできました。

そして今回、市民から「公民館がどんな施設なのか、外観から分かりにくい」という声が多く寄せられていることから、図書室中 2 階のガラスを含む正面のガラス面に、公民館がどのような場所かを伝える、70 周年記念メッセージを掲示することとなりました。

デザインやメッセージの内容は、メッセージ班の市民の方々と検討を重ねて、作り上げました。

ぜひみなさんに、70 年目に装いを新たにした公民館の入口「メッセージ」をご覧くださいと思います。



ことしも「まちじゅう本棚」開催します！



～本がまちの文化になる
まちじゅう、みんなで本をシェアしよう～

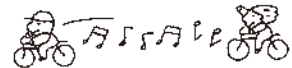
市内 5 か所にみんなでシェアする本棚を設置します



「自分ではもう読まないけれど、捨てるのはもったいない」「誰か必要としている人に読んでほしい」そんな本がお手元にありませんか。

読まなくなった本を持ってきたり、誰かが置いた本と交換したりできる、昨年大好評だった「まちじゅう本棚」が、今年は設置場所を増やして帰ってきました。

「まちじゅう本棚」では、自分が今まで目に留めなかったような本との出逢いがあるかもしれません。



◆と き 2 月 20 日 (金) ～ 3 月 22 日 (日)

◆と ころ 公民館 1 階市民交流ロビー (「喫茶わいがや」横)、むっさ 2 1
旧国立駅舎広間、市役所 1 階総合窓口前、郷土文化館地下 1 階ピロティ

*詳細は「市報くにたち」2 月 20 日号をご覧ください。

〈私の本棚から 第 6 回〉

辻村深月 著 『朝が来る』

川越 彩心



辻村深月さんは、今プロとして働いている作家の中で、私の一番好きな作家である。

彼女の強みは、なんといつても心情描写である。「感情移入」などの生ぬるいものではない。

まさに「疑似体験」、いや、「体験そのもの」というっても差し支えないだろう。

彼女の文章は、かつての文豪のように特別煌びやかであつたり、ある一点の描写において凄まじい才能を感じさせたり、そういったものはない。辻村さんの文体は、逆にそれが個性になっている程に、シンプルだ。

ただ、風景や感情を描く際の、「必要最低限」と「過剰」の塩梅。それがすごく巧い。「必要最低限」の描写といえ、人物の見た目の描写が少なく、ということも、

辻村さんの文体の特徴だろう。顔立ち、髪型、容姿、服装、そういった類のものは、基本的に描かれない。

唯ごくごく僅かな、それでいて正確な言葉だけで、読者の想像力を存分に掻き立て、いつの間にか、読者の

中で登場人物の容姿、性格、言葉遣い、何もかもが完成している、そんな状態にしてしまうのだ。これに気が付いたときの私の衝撃といったら。中学二年生なりに

かなり沢山の本を読んできたと自負しているが、それでも初めての体験だった。

愛があふれてしまったので、そろそろ本題に入りたい。

この物語の主人公は二人、栗原佐都子と片倉ひかりである。この話は、その二人の主人公の人生、苦悩、

そして、二人に共通して起こったとある不幸な事故(そう言うって正しいのか分からないが)などを、それ

ぞれの視点から描いている。初めに語られるのは、長い不妊治療の末に特別養子縁組という手段を選んだ栗原佐都子、すなわち栗原夫婦の物語だ。養子縁組によって一人の男の子を授かった栗原夫婦は、その男の子に「朝斗」と名づけ、平穩に暮らしていた。そんなある日、夫婦のもとに一通の電話が。それは「朝斗の産みの親」を名乗る人物からの「自分の息子をかえしてほしい」というものだった。これが、この本の簡単な粗筋だ。

この物語を読んでまず驚かされるのは、辻村さんの伏線回収の鮮やかさ、そして、登場人物の挙動のリアルさだろう。特に、二人目の主人公、片倉ひかりの心情描写には驚きを通り越して尊敬まで抱いた。先刻、彼女の文章の描写の簡潔さについて語ったが、この「登場人物の動き」、これこそ、先程述べた、登場人物たちが闊歩する「物語の世界」の描き方、そのものに繋がっているように感じる。辻村さんの作品を一度でも読んだことがある人であれば、きっと共感してくれるだろうが、彼女の作品で描かれる人物は全員、この世に実際に存在していると錯覚するほどに生々しい。「ああ、こういう人いるよね」、「わあ、こういうこと、絶対あるよね」と思わず膝を打つような、まさしく、「この世界を切り取って、本の形に直しました」と言われても納得してしまうような説得力が、彼女の物語にはある。

辻村さんの作品に、「ハズレ」という概念は存在しない。もしこの文章を読んで少しでも気になったのなら、是非、辻村作品を手にとってみてほしい。(文春文庫)

係から

川越さんの「私の本棚」は今回が最終回です。毎月それぞれ違った魅力のある本を丁寧に紹介していたので、ありがとうございます。

